

# ●誌上教材研究 その3

小学校教師による、小4社会科“地域の発展に尽くした先人の具体的事例”の教材研究  
—1枚の写真を通して

## 秋田杉をつくったのは…(上)

作成：小坂靖尚（秋田県増田町立増田小学校 教諭）

寸評：山下宏文（京都教育大学 教授）\*

「まっすぐに伸びたこの杉、いったい高さはどれくらいあると思いますか。実は、樹高58m、15階建てのビルの高さと同じくらいで、日本一背の高い杉なのです。直径は164cm、この木1本で55坪の家を建てることができるそうです。この杉は、天然秋田杉で、特別にキミマチスギという名前が付けられています。天然という言葉を聞くと、自然に育ってきたように感じます。でも、江戸時代から人の手が加えられ守られて今日まで育ってきたのです。秋田県は昔から杉の産地として有名でした。江戸時代には、たくさんの秋田杉が伐られ江戸（今の東京）へ送り出されました。秋田県にとってはお金を得るための大切な木だったのです。しかし、たくさんの木を伐ったために、しだいに山は荒れてきました。今から200年ほど前、秋田の殿様をしていた佐竹義和は、『今、杉の苗を植えても大きな木になるのは少なくとも40～50年後のこと。今すぐには、役には立たない。しかし、目先のことのみにとらわれてはいけない。私の代に役立たなくてもいつか“国の宝”となるときがくる』と言って、どうして山が荒れてしまったのか原因を探り、植林を進めるなどの手立てを打ったのです。そして、その手立てを支える働きをしたのが林取立役 賀藤景林という人物だったのです。」



▲キミマチスギ

○意図（小坂）：この写真を撮った仁鮎水沢スギ植物群落保護林は、樹齢200年を超える天然秋田杉の林である。天然秋田杉は、秋田藩主九代目佐竹義和や、その下で働いた「秋田杉の父」賀藤景林、そしてその遺志を継いだ長男景琴によるところが大きい。現在ある天然秋田杉は、「天然」という名が付いてはいるが、それは、人手が何も加わらない自然に育ったものではなく、先人たちによって育てられ、そして守られてきたものである。子どもたちには、これら先人の働きをとらえさせ、さらにこれから自分たちの地域の山林をどうしていったらいいのか考えるきっかけとさせたい。

○寸評（山下）：この單元では、「地域の開発、教育、文化、産業などの発展に尽くした先人の具体的事例のいずれかを取り上げ、地域の発展に対する先人の願いや工夫・努力、苦心、地域の人々の生活が向上したことなどについて調べる」となっている。作成者は、その教材として「秋田杉」（林業）を取り上げようとする。森林・林業には、「先人の願いや工夫・努力、苦心」等が限りなく詰まっている。そこに着目し、それを教材化しようとする意図は適切である。こうした先人が築き上げてきた森林文化を、私たちは継承・発展させていかなければならないからである。

\* 〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 TEL.075-644-8219（直通） E-mail: mountain@kyokyo-u.ac.jp